

ドイツのエコ建築家 ヴォルフガング・レーナート博士の 講演「ブルーノ・タウト、青雲の志と現代」



W. レーナート博士

お茶の水女子大学名誉教授・工博 田中 辰明

はじめに

熱海ブルーノ・タウト連盟(矢崎英夫会長)主催で、2023年4月11日、熱海市の起雲閣において、ヴォルフガング・レーナート(Wolfgang Lehnert)博士とマンフレッド・シュパイデル(Manfred Speidel)教授による講演会が催された。「青雲の志と現代」と題されたこの講演会は、日本バウハウス協会(浅野利忠理事長)が共催した。シュパイデル教授の講演は同教授が最近出版した「日本の工芸芸術と家具」という本のタイトルと同じものであった。レーナート博士の講演を筆者が通訳したので、その内容を報告する。



写真1 ヴェルクブンド創立者の一人
ヘルマン・ムテジウス

1. 建築家ヴァルター・ロッソーの言葉

皆様、こんにちは、ドイツのエスリンゲンで建築設計業を営んでおりますヴォルフガング・レーナートです。「ブルーノ・タウト・青雲の志と現代」という題でお話いたします。

ドイツの有名な建築家ヴァルター・ロッソー(Walter Rossow)は、1966年10月から1975年まで、シュトゥットガルト大学建築・都市計画学部景観計画研究所教授兼所長でしたが、1980年に次のように申しております。

「ブルーノ・タウトの作品を理解するには、この時代の政治的、知的、経済的状况を知っていなければ正しく理解できないであろう。それほどブルーノ・タウトが活躍した時代は波乱万丈に富んだ時代でした」。



写真2 ヴェルクブンド創立者の一人
テオドール・フィッシャー

2. ヴェルクブンドの初期のメンバー

20世紀初頭のヨーロッパは、美術や建築に新しいビジョンが生まれた時代です。

この時代をリードした人たちの目的は、歴史主義を克



写真3 ヴェルクブンド創立者の一人
ペーター・ペーレンス

服し、社会の変化に対する答えを見出すことでありました。1906年、ドイツで「ヴェルクブント」が設立されました。そのビジョンは、建築と工業生産をデザインで融合させることでした。ヴェルクブントには建築家のみならず、手工業者、政治家、事業経営者も参加しました。ヴェルクブントの最も重要な創設者メンバーの、建築家はヘルマン・ムテジウス、テオドール・フィッシャー、ペーター・ペーレンスなどの新しい時代を切り開いた人たちでした。第一次世界大戦前、テオドール・フィッシャーとペーター・ペーレンスの事務所で働いた若い建築家たちが、やがて20世紀の建築界を変え、世界的な偉人になるとは誰も想像できませんでした。例えば、後にシュトゥットガルト建築学校の代表として知られるようになるブルーノ・タウトとポール・ボナツは、同時期にシュトゥットガルトのテオドール・フィッシャーのもとで働いていました。テオドール・フィッシャーはミュンヘンの都市計画を行い、シュトゥットガルト大学で建築学を教授しておりました。一方で個人の建築設計事務所を主宰し、そこにブルーノ・タウト、マックス・タウト、パウル・ボナツ、フーゴ・ヘーリング、エルンスト・マイ、エーリッヒ・メンデルゾーンなどのちに有名になる有能な建築家が勤務しておりました。同様に、ペーター・ペーレンスの事務所にはミース・ファン・デル・ローエとヴァルター・グロピウス、ル・コルビジエも、勤務しておりました。(写真1~3)

3. ヘルマン・ムテジウス (Hermann Muthesius)

ヘルマン・ムテジウスは、1910年から1916年まで、プロイセンの官僚建築家でした。氏がヴェルクブントの第2代会長を務めていました。ムテジウスは、美術史と建築におけるイギリスの改革運動の専門家でありました。英国は欧州の大陸から離れた島国で、欧州大陸の影響を受けずに独自の建築活動が進められており、ムテジウスはそれに注目しました。そして英国に留学しました。彼の建築は、イギリスのカントリーハウス(田園住宅)を志向していました。

留学後、1887年からベルリンの建築事務所エンデ&ベックマンに勤務し、その事務所が受けた日本の官公庁の建築に携わりました。1891年まで日本に滞在し、初めて独立した依頼を受けました。それは、皇居外苑やプロテスタント大学(新教新校舎)に近い戸越坂のドイツ・

プロテスタント教会であります。ムテジウスは日本の建築を紹介する本を著しましたが、ドイツの役人という立場で来日しておりますので、ブルーノ・タウトのように自由な表現で執筆することは出来なかったようです。日本の建築を表面的な観察で紹介しております。

4. テオドール・フィッシャーと ブルーノ・タウト

ヴェルクブントの創設者たちは、若い建築家にとって非常に魅力的な存在でした。ブルーノ・タウトは1906年からシュトゥットガルト大学教授テオドール・フィッシャーが開設していた個人事務所に勤務することになりました。その後まもなく妻のヘドウィグと結婚し、1907年には息子のハインリッヒがシュトゥットガルトで誕生しております。

テオドール・フィッシャーのもとで働いたことで、タウトは完全にフィッシャーの建築に心を奪われました。フィッシャーも、この陰気で、同時にせっかちな若い建築家を理解しました。フィッシャーは、タウトを最高の弟子とし、タウトの収入を補うために小さな仕事を繰り返し与えました。しかも午後はタウトが自由に過ごせるように配慮しました。

シュトゥットガルトのテオドール・フィッシャーの代表的な作品として、「クンストゲボイデ・アム・シュロスプラッツ」(Kunstgebäude am Schloßplatz)と「エルレッツセッサー教会」(Erlöserkirche)が挙げられます。

5. 教会建築 ウンターレキシング (Unterreiexingen)の村の教会

1906年、テオドール・フィッシャーが受けた仕事を、タウトが全面的に任されて初めて独立した仕事を行うことができました。ルートヴィヒスブルク近郊のウンターレキシング村の教会の改修でありました。当初は、破損したオルガンのみが教会から撤去される予定でした。しかし、ブルーノ・タウトは礼拝者席の配置を変えることも計画しました。さらに、祭壇を聖歌隊の方向に戻し、その上に八角形の祭壇台も置くことにしました。色は、暗緑色の教壇、水色の壁、赤茶色の天井となりました。落成式の日、ブルーノ・タウトは日記に次のように書きました。“美しい日だ。私の最初の作品が完成した。ウンターレキシングの農民教会は強い色彩で燦然と輝いて



写真4 ウンターレキシゲン村の教会

いる”。(写真4)

6. イエナのフリードリッヒ・シラー大学(1904-1908)

1908年、ブルーノ・タウトはベルリンに戻り、個人の建築設計事務所を開設しました。当初は小さな依頼しかありませんでした。テオドール・フィッシャーはタウトを助けようと、イエナ大学のカラフルな内装のデザインをタウトに任せました。ブルーノ・タウトは、1906年以來、イエナ大学の設計図を描いていました。(写真5)

7. 工場建築 - ハコルトヴェルケのタービンハウス

テオドール・フィッシャーの支援により、ブルーノ・タウトは1908年、ハコルトヴェルケのタービンハウスの新築という、より大きな依頼を受けることになりました。



写真5 イエナのフリードリッヒ・シラー大学

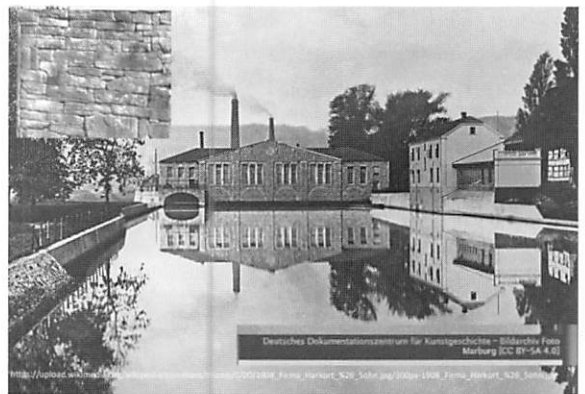


写真6 ハコルトヴェルケのタービン工場

た。ハコルトヴェルケの所有者は、フォルクヴァンゲン美術館の創設者であり、多くの若い芸術家のパトロンであったカール・エルンスト・オストハウスでありました。ブルーノ・タウトもまた、その後の新しい建築活動に、個人的に大きな援助を受け、友好的な協力を受けた恩人です。

タービンハウスの古典的なデザインの特徴は、石で縁取られた窓や、台座部分のまぐさのアーチなどです。建物の素材は、色鮮やかなルールコーレンの砂岩です。非常に硬い素材で、ダークグレーに赤い脈が走っています。

ハコルトの工業用建物は、タウトがテオドール・フィッシャーの絵画的で家庭的な建築から解放され始めた設計段階の出発点となりました。(写真6)

8. ヴェルクブンドの 第二世代のメンバー

第一次世界大戦が終わった後、1918年から、ヴェルクブンドの世代交代が行われました。ヴァルター・グロピウス、ブルーノ・タウト、ミース・ファン・デル・ローエ、エーリッヒ・メンデルゾーンといった新建築運動の代表者が中心人物となりました。1920年代、この世代はモダニズムと新しい「インターナショナルスタイル」のビジョンと基本原則を確立しました。インターナショナル建築とはドイツが第一次世界大戦で敗戦し、厭戦気分

が漂っていた時代に生まれたものです。民族主義を排し、世界のどの国でも使用できる共通の建築を作ろうとする運動です。シュトゥットガルトのヴァイセンホーフジードルング(Weißenhofsiedlung)は、この時代、そしてこ



写真7 アルフェルドのファグス靴型工場
(1911, ヴァルター・グロピウス設計)



写真8 ポツダムのアインシュタイン塔
(1929, エーリッヒ・メンデルゾーン設計)

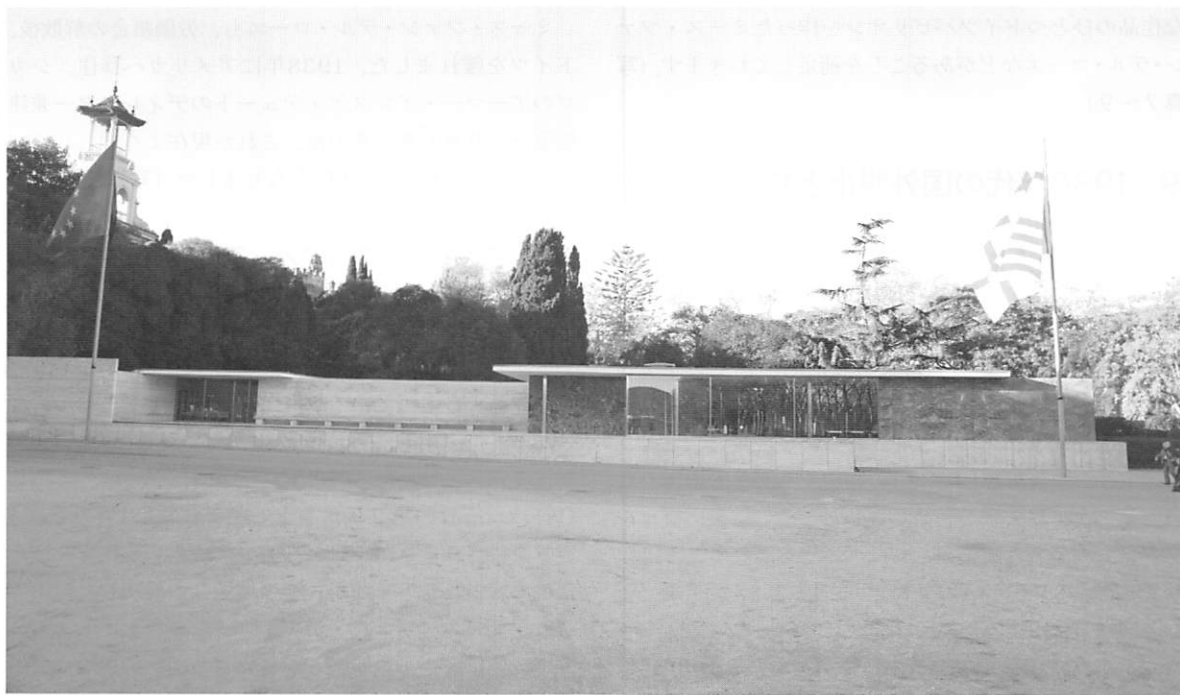


写真9 バルセロナの万博ドイツパビリオン(1928, ミース・ファン・デル・ローエ設計)

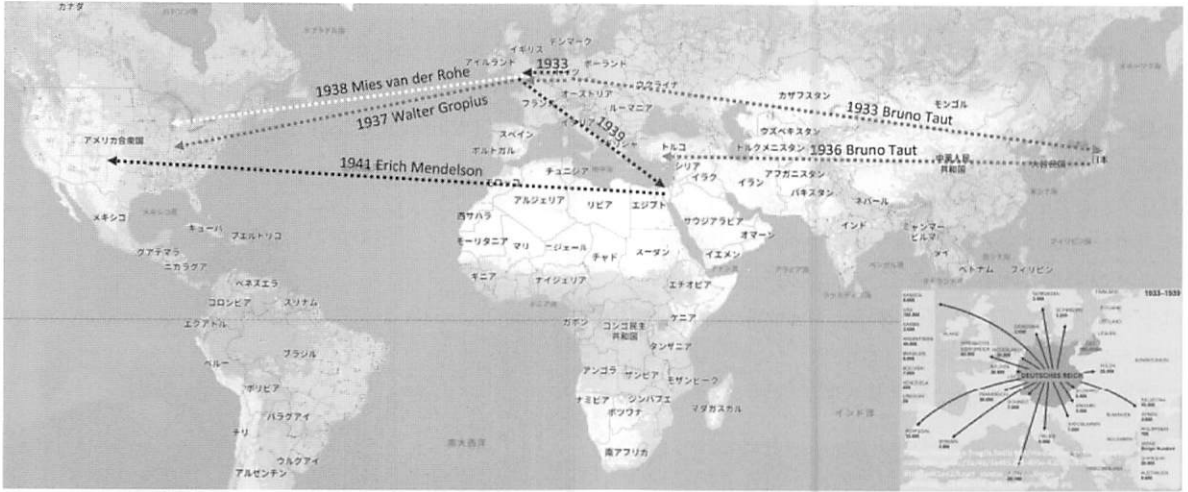


写真10 ナチス政権誕生によりドイツを脱出した建築家達

の運動ののハイライトのひとつであります。

この世代の初期の顕著な証言として、1911年に建てられたヴァルター・グロピウスによるアルフェルドのファグス靴型工場、1914年のヴェルクブント展でのブルーノ・タウトによるガラスの家パピリオン、1920年のポツダム「アインシュタインの塔」で表現主義建築の優れた例を実現したエーリッヒ・メンデルゾーン、1928年のバルセロナパピリオンで近代建築における最も重要な作品のひとつドイツパピリオンを作ったミース・ファン・デル・ローエなどがあることを補足しておきます。(写真7～9)

9. 1930年代の国外脱出と亡命

1930年代に入り、ヴェルクブントを取り巻く状況は劇的に変化しました。まず1929年の経済危機による経済的影響、そして1933年からはヒトラーが率いる国家社会主義(ナチス)の台頭による政治的影響でありました。このような展開から1938年、ミース・ファン・デル・ローエはヴェルクブントを解散致しました。

国家社会主義思想(ナチス)の制約やユダヤ人迫害のため、第二次世界大戦が勃発しました。その結果、ヴェルクブントの著名な建築家たちはドイツを離れることになりました。ブルーノ・タウトは、エーリッヒ・メンデルゾーンと同様、1933年の初めには逃亡しています。ブルーノ・タウトは、まず逃亡先で日本にやってきて、1936年にトルコに移住することができました。ユダヤ人建築家の

エーリッヒ・メンデルゾーンは、パレスチナに逃れ、テルアビブで働き、1941年にアメリカに移住しました。

1934年、国家社会主義者(ナチス)たちは、ヴァルター・グロピウス率いるバウハウスを「マルクス主義の協会」と指定しました。この攻撃の後、ヴァルター・グロピウスはまずイギリスに移住し、1937年にアメリカへ渡りました。そこでハーバード大学の教授となり、コンラッド・ヴァックスマンと共に仕事をしました。

ミース・ファン・デル・ローエも、労働組合の解散後、ドイツを離れました。1938年にアメリカへ移住。シカゴのアーサー・インスティテュートのディレクター兼建築家となりました。その後、これが現在よく知られているイリノイ工科大学(IIT)となりました。(写真10)

10. ミース・ファン・デル・ローエとヴァイセンホーフジードルング

ドイツでは、ミース・ファン・デル・ローエの最も重要な作品のひとつであるヴァイセンホーフジードルング「Weißenhofsiedlung」プロジェクトが行われました。1926年、ミース・ファン・デル・ローエは、ヴェルクブント(Werkbund)の第2代理事として、「住まい」展の管理・運営を任せられました。異なる国から17人の建築家を選んだ彼のビジョンと手腕が、この展覧会の成功した理由でした。ミース・ファン・デル・ローエがヴァイセンホーフで、建築家・コルビュジエ、ヴェルテンベルク労働組合専務理事グスタフ・ストッツと対談している写真も

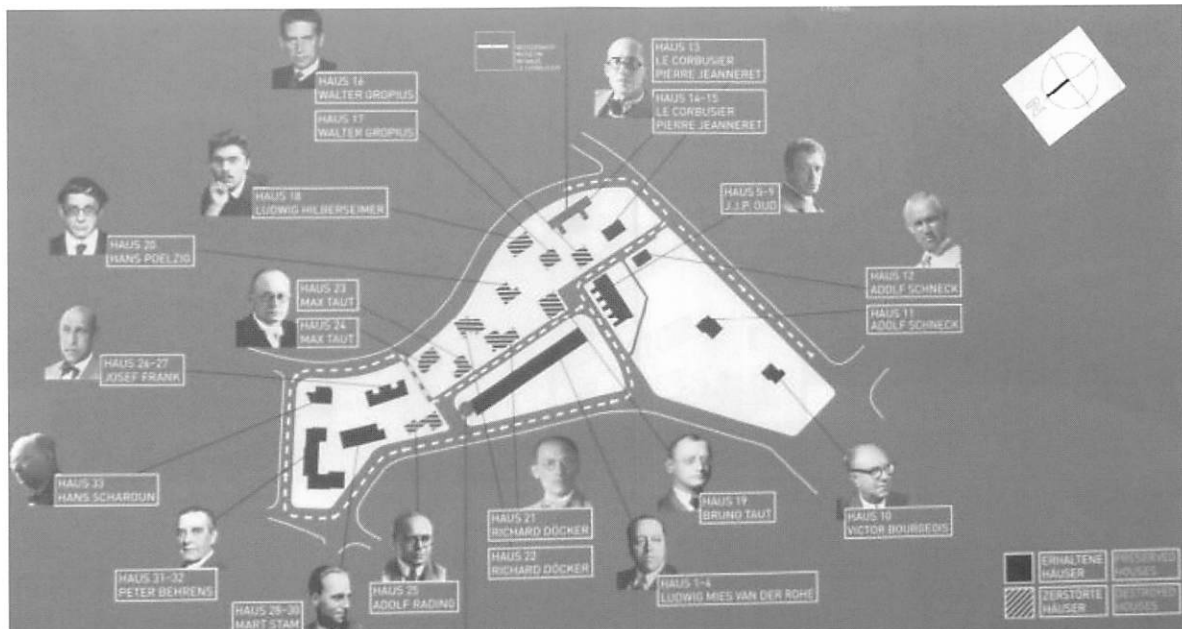


写真11 ヴァイセンホーフジードルング



写真12 シャロン設計の住宅(ヴァイセンホーフジードルング)



写真13 コルビジェの住宅(ヴァイセンホーフジードルング)

残っております。

ミース・ファン・デル・ローエは、33の建物と63のアパートを備えたモデル集落の開発計画も設計しました。開発計画の唯一の条件は、平らな陸屋根を採用するという事でした。モデルハウスの計画には、内装の家具も含まれていました。第二次世界大戦とその後に破壊されたため、現在残っているのは23棟だけであります。1958年から重要建築物として登録されています。その中でも、ル・コルビュジェの家は世界遺産に登録されています。(写真11～13)

11. ミース・ファン・デル・ローエのハウス1-4

ミース・ファン・デル・ローエは、ヴァイセンホーフの建築展で「新しい住まい」の構想をブロックとして実現しました。この集合住宅を設計する際、彼は未来を志向する形体を用いました。それは、支えと壁の分離であります。すなわち、カーテンウォール構造を採用したのであります。

この団地は、ミース・ファン・デル・ローエが初めて鉄骨の骨組みを使った建物でもあります。この建物展以



写真14 ミース・ファン・デル・ローエの住宅(ヴァイセンホーフジードルング)

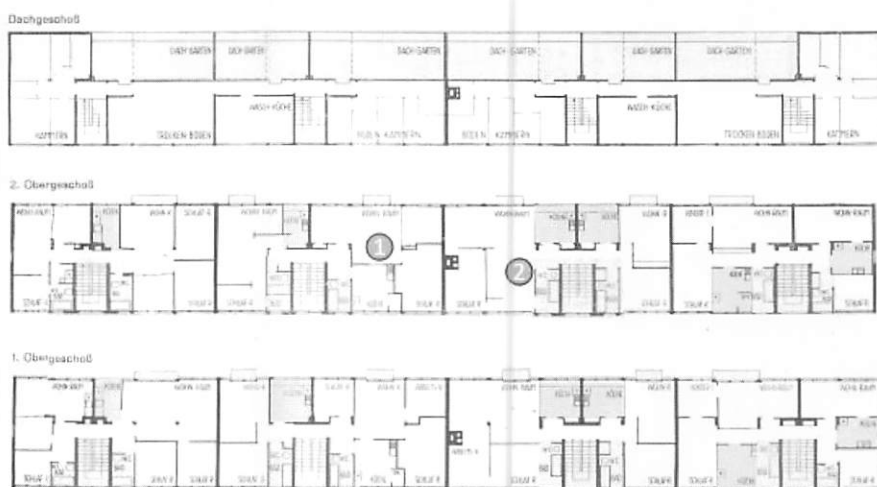


写真15 ミース・ファン・デル・ローエ住宅平面図(ヴァイセンホーフジードルング)

降、鉄骨造の建物は、彼の新しい建築スタイルの一部となりました。

ミース・ファン・デル・ローエが設計した4階建ての集合住宅は、4つの家が隣り合わせに配置されています。正面ファサードの4つの階段の垂直ガラスを通して、それらが見えるようになっています。

ハウス1-4は、合計24戸の住戸で、展覧会の中でも最も大きな建物のひとつです。ミース・ファン・デル・ローエが内装を手がけたのは3棟だけで、他の棟の内装は他の建築家に託されました。例えば、ハウス4の住戸は、スイス・ヴェルクブントの集団が計画したものです。合計29人の建築家がインテリアプランニングに携わりました。(写真14)

12. ミース・ファン・デル・ローエのファサード

ミース・ファン・デル・ローエは、庭に面したファサードに狭いバルコニーとルーフテラスを設けました。こうすることで、ファサードの水平な窓の帯を中断し、長い団地の眺めを生き生きとしたものにしたのであります。当初の計画では、屋根裏に洗濯室と収納室がありました。現在あるルーフテラスは、洗濯物を干すためのものであります。1984年から1986年にかけての改修工事では、この屋根裏部屋にさらに4つの住戸が設置されました。

13. 床平面がフレキシブルニナル インテリア

ミース・ファン・デル・ローエは、この集合住宅で、彼の全作品に通じるデザインテーマを確立しました：バルセロナ・パビリオンやノイエ・ナショナルギャラリー（ベルリン）のように、支持体と壁を分離することで、間取りを柔軟にすることができたのです。ヴォンブロッホハウス1～4では、階段、厨房、浴室、便所だけが間取り図に固定されて計画されています。生活、睡眠、書斎に用いられる部屋は、間取り図の中で自由に配置することができます。多くの建築家が参加したため、すべての住戸の間取りは異なっております。

ミース・ファン・デル・ローエは、ハウス2のフラット10と12でインテリアデザインを担当しています。アパート10は1階に、居間、書斎、寝室のあるオープンなフロアプランになっています。2階のフラット12では、オープンなフロアプランが居間と寝室部分に分けられています。フラットのインテリアの家具は、ミース・ファン・デル・ローエがデザインしました。(写真15)

14. ヴァイセンホーフの椅子

マルト・スタムとミース・ファン・デル・ローエの集合住宅は、1927年にヴァイセンホーフで展示されたとき、後ろ足のない椅子を使った家具を持つ唯一の家でした。もともと、ロッテルダムでマルト・スタムは、妊娠中の妻のためにスチールパイプで作った背もたれのない椅子をつくりました。いわゆるカンチレバーチェアの先

駆けであります。マルト・スタムは1926年、この構造をミース・ファン・デル・ローエに報告しました。ミースは、この椅子のスリーブとの接続を醜いと感じました。ミースは、「せめて丸みを帯びていたら、その方が素敵なのに」とコメントし、アーチをスケッチしました。スタムのスケッチに手を添えてお辞儀をただけで、新しい椅子ができあがったのです。この椅子は、ヴァイセンホーフチェアとして知られるようになりました。その構造は、直径25mmのスチールパイプで、写真のようにリリー・ライヒによる鉄の糸紐や籐細工で覆われていました。(写真16)



写真16 ヴァイセンホーフ椅子

15. 鉄骨構造と断熱

ヴェルクブント展覧会の目的のひとつは、そのために新しい建築材料や工法を試すことでした。ミース・ファン・デル・ローエは、鉄骨造のスケルトン構造で集合住宅を建設しました。鋼材の柱と柱の間の空間は、外壁用のレンガが詰められていました。レンガは鋼材の間隔に収まるようになっていました。これにより、スペースを節約することができました。

断熱性を高めるため、内側には厚さ4cmのトルフォリウム製の断熱材が貼られました。トルフォリウムとは、泥炭（PEAT）を原料とする断熱材であります。

1929年、ドイツ帝国の「経済、建設、住宅研究協会

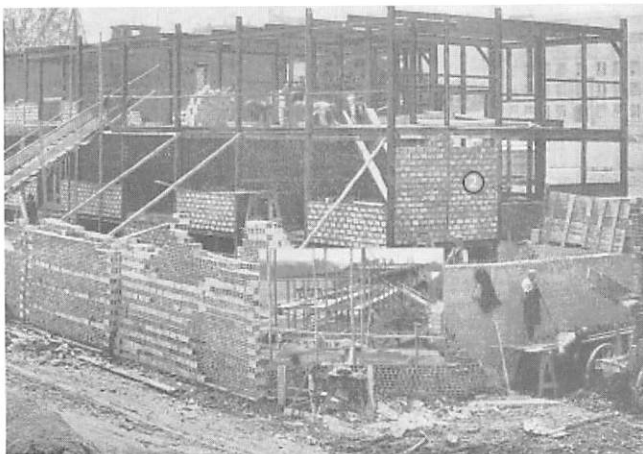
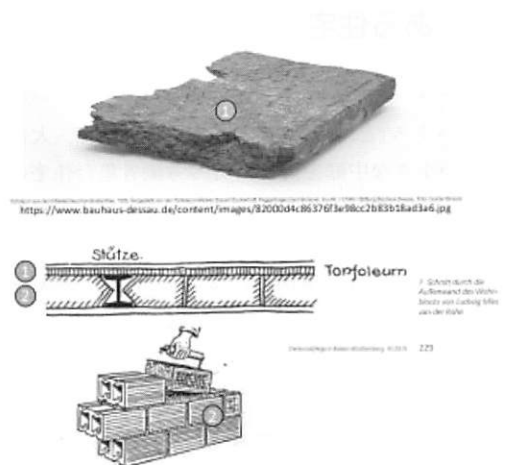


写真17 ミース・ファン・デル・ローエの鉄骨と断熱



(Reichsforschungsgesellschaft für Wirtschaftlichkeit im Bau- und Wohnungswesen e.V.)は、ヴァイセンホーフジードルングに関する報告書を発表しました。その内容は、特に新たに採用された工法の耐用年数に関する最初の調査結果を報告しております。

ミース・ファン・デル・ローエが採用した鉄骨造のスケルトン工法に関して、ファサードから見え、外装がないため断熱材、外壁材のさまざまな素材が高温の変動にさらされたことが判りました。高温の変動にさらされる。これらにより、特に長さの変化が認められました。その結果、外壁の漆喰が応力を吸収しきれず、鉄骨の支柱に沿ってクラックが発生しました。(写真17)

16. ヴァイセンホーフジードルングのテラス

ヴァイセンホーフジードルングを訪れた人々にとって、陸屋根とリボン状の窓を持つ矩形のデザインの家々は、新鮮で見慣れないものだったようです。また、多機能な居住空間屋上や庭に設けられたテラスも特徴的です。このようにこうして、健康的で柔軟な、寛容な暮らしが提示されました。

ル・コルビュジエは、『新しい建築の5つのポイント』の中で、陸屋根の上のルーフガーデンは、庭として役立つだけでなく、コンクリートの屋根を保護する役割も果たすと述べています。ル・コルビュジエは、ルーフガーデンを外部空間への繋がりとして住宅に導入していません。

17. ペーター・ベーレンス - テラスのある住宅

ペーター・ベーレンスは、自分のモデルハウスを「テラスハウス」と名付けました。彼にとって、大都市にある狭い小さな中庭を持つ当時の労働者集合住宅の建築方法は、病気の原因であるとも言っております。彼の考えによれば、すべての陸屋根構造建築は「広い空の下に自由な空間があり、風通しが良い」として、陸屋根を推奨しました。そのために、屋上にはベッドやリクライニング家具を置くためのオープンスペースを設けることを提案しています。

ヴァイセンホーフジードルングのテラスハウスでは、平屋、2階建て、3階建て、4階建てを1つの住宅群に



写真18 ペーター・ベーレンスの住宅
(ヴァイセンホーフジードルング)

まとめて計画しました。その結果、下の階のアパートの屋根にテラス部分ができっています。また、1階と2階のテラスのない住戸には、それぞれバルコニーを設けています。(写真18)

18. ブルーノ・タウト、マックス・タウトのテラス

ブルーノ・タウトは、ヴァイセンホーフジードルングにガーデンテラスとルーフテラスを備えた労働者住宅を建設しています。彼は、1階のガーデンテラスを、生活と仕事のエリアに属する屋外のシーティングエリアと表現しています。眺めが良いので、南と東に向けた配置となっています。上階のルーフテラスの機能については、残念ですが、情報がありません。ブルーノ・タウトは、眺めの良さから北東向きと説明しています。この向きだと、ネッカー川の溪谷をよく見ることができるのです。(写真19)

19. 1940年代のヴァイセンホーフジードルング - アラビアの村と評されました。

ヴァイセンホーフジードルングの住宅が、近代的な生活や新しい建築の象徴として国際的に有名になりました。この名声は1927年に展覧会が終了した後も続きました。例えば、ヴァルター・グロピウス、ル・コルビュジエ、J. J. P. ウード、ミース・ファン・デル・ローエといった建築家の住宅は、1932年にニューヨークで開



写真19 ブルーノ・タウトの労働者用住宅(ヴァイセンホーフジードルング)

かれた「近代建築－国際展覧会」でアメリカの人々に紹介されました。その時、このヴェルクブントの展示会ヴァイセンホーフジードルングが、大成功を収めたにもかかわらず、一年後には不評を買うとは誰も想像できませんでした。1933年にヒトラーが政権を取りました。ドイツの国家社会主義(ナチス)は白い陸屋根のテラスがあることから、ヴァイセンホーフジードルングは「アラブの村」と呼ばれるようになりました。ナチスのプロパガンダに乗せられ、この近代建築に対する嫌悪感は大きく、1930年代にはこの集落は取り壊される予定にまでなりました。おそらく、戦争の勃発によって、この開発は阻止されたのだと思われます。国家社会主義者(ナチス)の予想に反して、ヴァイセンホーフジードルングは4年後の2027年にシュトゥットガルトで開催される国際建築展IBA'27で100周年を祝うことができます。ブルーノ・タウトも「政治は芸術に口出しをしてはいけない」と申しております。(写真20)

私はブルーノ・タウトの若い時代の活躍についてお話をいたしました。ブルーノ・タウトはベルリンで沢山の労働者用集合住宅を建設し、4つのジードルングが世界文化遺産に登録され、有名になりました。しかし若い時は教会、工場、大学校舎などを設計していたことをご紹介いたしました。ご清聴有難うございました。



写真20 ナチスが「アラビアの村」と批判したヴァイセンホーフジードルング

おわりに

ここに報告したのは2023年4月11日に熱海の起雲閣で行われたヴォルフ・ガングレーナート博士の講演「ブルーノ・タウト－青雲の志と現代」の第一部の内容である。第二部とし、「ブルーノ・タウトの志とSDGs」という対談がレーナート博士と筆者の間で行われた。貴重な内容が含まれているので本誌で紹介する予定である。

〈参考文献〉

1. 田中辰明 ヴォルフガング・レーナート博士による講演「知られざるヴァイセンホーフジードルングとブルーノ・タウト」月刊建築仕上技術2022年9月号
2. 田中辰明 W. レーナート博士講演、「木質系断熱材と木造建築の発展」月刊建築仕上技術2017年2月号
3. 田中辰明「ドイツのエコ建築家ヴォルフガング・レーナート博士の講演」、月刊建築仕上技術2019年12月号